

■ 戦略 3：治療効果判定と評価

1. 急性低血圧症

ショック状態を脱し、血行動態が安定してきたら、カテコールアミンの持続点滴を減量し、必要なら経口カテコールアミンに変更する。

2. 慢性低血圧症

薬物療法に併用される精神安定剤は、神経症的要素が強いものや、不定愁訴の改善目的にてしばしば汎用されるが、効果があるとは限らない。さらに自律神経調節剤も使用されるが、あまり効果

は期待できない。

低血圧症の治療において、自覚症状と血圧値は必ずしも相関しないため、治療効果判定、評価には血圧上昇より自覚症状の改善を優先すべきであると考えられる。

■ 文献

- 1) 筒井末春：低血圧症，石川恭三（編）：新心臓病学，p154，医学書院，1986
- 2) 桑島 巖：起立性低血圧の分類と治療方針．臨床医 19：130-131，1993

書 評

萬年 徹・宮武 正 監訳

メリット神経病学 第3版(原著第8版)

柳原 武彦(大阪大学医学部神経内科)

本書の英文原著は1955年に故HH Merritt教授により“Text book of Neurology”として初版が出版されて以来、米国の代表的な神経学の教科書として広く親しまれ、現在第8版に至っている。初版から第6版まではMerritt教授がみずから手を下されたが、その後LP Rowland教授を編者として引き継がれ、1989年に出版された第8版はコロンビア大学のニューヨーク神経研究所で両教授の薫陶を受けた70人以上の神経学者、神経学専門医を中心に執筆されている。

この第8版では前版までに広く記載のあった脳血管障害、中枢神経変性疾患、脱髄性疾患、神経系腫瘍、感染症、てんかん、末梢神経障害、筋疾患に新しい知見が加えられ、最近日本でも問題となっているエイズに関しても、その神経系に見られる症候や合併症の記載がみられる。欧米では近年、悪性腫瘍に関連した神経疾患が臨床の場で鑑別診断の一つとしてよく問題になるが、この版でも傍腫瘍性症候群などに最新の知見が記載されている。また、神経系に数多くある遺伝性疾患についても、リソゾーム病のように代謝異常の確立されているものについて、その異常が詳細に記述されている。

本書の特徴は、1冊にまとまった読みやすい神経学の教科書であることだが、各疾患につき病因、疫学、病理、臨床徴候、検査、治療などが簡潔に述べ

られており、病理所見の写真にもMRIを含めての画像診断にも十分の考慮が払われている。また、本書には各章ごとに適切な引用文献の記載があり、不可解な点や興味のある点は引用文献により容易に確認したり、さらに深く検索できる。

本書の日本語版は初版、第2版と故椿忠雄教授のもとで新潟大学神経内科教室を中心に翻訳がなされ出版されたが、この第3版の監訳には三井記念病院院長の萬年徹教授と新潟大学神経内科の宮武正前教授があたられ、翻訳も新潟大学神経内科の同窓の諸先生を中心になされている。総体において英文原著が正確に翻訳されており、各翻訳者によるスタイルの違いも監訳者の努力により一貫性が保たれているので、日本語版を読むことにより英文原著の真意を酌み取ることができる。また、日本語の専門用語が最近日本神経学会で決められた用語に統一されている点も、日本で使われる神経学の教科書として大きな利点である。

本書は欧米において神経学専門医から医学生まで広く読まれており、欧米の第一線の神経学を簡潔に知るには最適の教科書である。日本においても本書は神経学専門医、神経学を志す若い先生方、内科医、脳神経外科医、精神科医、小児科医に広くお勧めできる神経学の教科書である。

(B5判 920頁 17,510円(税込) 1994年 医学書院刊)